ブラジル系ニューカマー第二世代の職業志向
―「欠落／喪失」の資源化に注目して―

児島　明*

An Analysis of Occupational Orientation among Brazilian Newcomer Second Generation

KOJIMA Akira*

キーワード：ブラジル系ニューカマー第二世代，経験の資源化，職業志向
Key Words: Brazilian newcomer second generation, developing experience into resources, occupational orientation

Ⅰ．課題の設定

本稿の目的は，義務教育段階において日本の公立学校に通った経験を有するブラジル系ニューカマー第二世代のその後の進路形成のありようとその規定要因について，ライフストーリー分析の手法を用いてあきらかにすることである。主要な問いは次の２点である。第一に，ブラジル系ニューカマー第一世代の来日経緯や生活状況は第二世代の学校経験や進路選択にどのような影響をおよぼすのか。第二に，そうした影響下で成長する第二世代において資源形成はどのようにおこなわれ，職業志向へと結びついていくのか。

第一の問いに関連する，教育社会学の分野での先駆的な研究として，「家族の物語」と「教育戦略」の視点から三つのエスニック・グループ（日系南米人，インドシナ難民，韓国系ニューカマー）の特徴を分析した志水編（2001）がある。そこで描かれた日系南米人の姿は，出稼ぎゆえの「仮住い」意識によって特徴づけられる「一時的回帰の物語」のもとで，特定化された「教育戦略」をなかなか打ち出せないでいるというものであった。そうしたなかにあって日系南米人がかろうじてとっていた「教育戦略」が，家庭での母語使用・文化伝達については「最低限の環境づくり」，学校観・学校とのかかわりで言えば「日本文化伝達の場としての期待」，子どもの進路への希望とそれへの対応という点では「市場価値のある言語習得の奨励」というものであった。この報告書が刊行された時点では，日系南米人の「家族の物語」は「日本における滞在の長期化という趨勢のものとで，いやおうなく再編を迫られることなる」（同書, p.365）だろうとの見通しが述べられていた。だが, 2008年秋のリーマン・ショック以降，ますます浮き彫りになった不安定な雇用状況に鑑みれば（樋口2010），少なくともブラジル系ニューカマー第一世代におけるこの物語の有効性は，いまだ失われていないと考えるほうが妥当だろう。

ただし，志水編（2001）では，「家族の物語」という分析概念が示すとおり対象の主観的な側面にやや視点が偏っていたのも事実である。たしかに，第一世代が日本でいかに生き抜いているかを理解するにあたっては，「不安定な法的地位や厳しい経済的条件がかならずしも直接的にかれらの生活を規定しているわけではない」（志水編 2001, p.196）という立場から日本での生活に対するか

*鳥取大学地域学部地域教育学科

れらの意味づけに注目することは大きな意味をもつだろう。しかしながら，第二世代の経験は，第一世代がおこなう生活への意味づけに影響を受けながらも，自らをとりまく構造的要因，とりわけ家族および自らのエスニック・グループが社会経済的にどのように客観的に位置づいているかにやはり大きく左右される。その意味では，第一世代の経験をあらためて社会構造的に位置づけ直す必要があるものと思われる。

その点で参考になるのが，移民の「編入様式」に関するポルテスとルンバウトの議論である。ポルテスらは，移民が移住先にどのように編入されるかは，「受け入れの文脈」に応じて異なるとし，その主な構成要素として，受け入れ国の移民政策，労働市場，エスニック・コミュニティを挙げる。そして，これら三つの次元の組み合わせにより，移民の編入様式が決まるとしている（Portes&Rumbaut 2006）。ポルテスらの議論は，アメリカへの移民の定住を前提に，適応の成否をめぐる要因を見出そうとするものであり，定住をかならずしも前提としない本稿のブラジル系ニューカマーのような存在を想定してはいない。端的に言えば，繰り返される移動という視点を欠いているのである。だがこのことは，ポルテスらの枠組みを援用することをさまたげるものではない。むしろ，あえてその枠組みに沿って分析をおこなうことにより，ブラジル系ニューカマー第一世代の編入様式の特徴およびそうした特徴を生みだす日本社会のありようを鮮明に浮かびあがらせることができるだろう。

このようなブラジル系ニューカマー第一世代の編入様式の特徴をふまえ，本稿で中心的に検討することになるのが第二の問いである。第二世代の職業志向にかかわる資源形成という点でまず注目したいのは，言語習得とエスニシティである。というのも，この二つは，アメリカ移民第二世代の適応に注目したポルテスとルンバウトの研究においても適応の度合いを測る主要な要素とされているように（Portes&Rumbaut 邦訳 2014），第一世代との経験のちがいを端的に示すものだからである。

さらに，第二世代にとっての移動は多くの場合，自らの意思によらないという点で第一世代のそれと大きく異なる。そのため，第二世代の移動は剥奪や喪失の経験をともなうことが少なくない。こうした剥奪や喪失の経験に注目すれば，第二世代の経験は再生産論の文脈で論じられることになる。実際，頻繁な移動にともなう不利益については，学校から離脱し早くから工場労働に従事する事例にもとづきながら，再生産論の文脈で論じられることが多かった（児島 2008）。だが，そこでは事例の対象年齢が比較的低かったことが影響し，その後の資源形成の可能性やそれをふまえてなされる軌道修正の可能性など，かならずしも再生産論のみでは説明しきれない現実は，いまだ十分に解明されないままである。本稿の調査対象者が，離学後の一定期間，工場労働を経験していたとしても，現在は全員がそれ以外の職業に従事し，将来的にも志向している現実は，そこにいたるまでの過程についてより精緻に分析する必要性を示していると言えよう。

そこで本稿では，ブラジル系ニューカマーのエスニック・グループとしての編入様式の特徴が第二世代の資源形成にどのように影響をおよぼし，かれらの職業志向を生みだしていくのかを検討する。その際，とくに注目したいのが，移動の結果として生じるエスニシティや学業・進学の不安定化をどのように対処可能なものにしているのか，すなわち「欠落／喪失」の資源化という視点である。

アメラジアンスクールに子どもを通わせる母親の経験を論じた野入（2014）は，一定量の資本に恵まれていることがかならずしも教育戦略を行使しうる要件ではないとし，つぎのように述べる。

> アメラジアンスクールに子どもを通わせている母親においては，しばしば，いわゆる「資本」の欠落やライフヒストリーにおける喪失，剥奪の経験こそが，むしろ「行為者」としての自己を

成り立たせてきた資源として意味づけられている。（野入 2014, p.47）

今回対象とするブラジル系ニューカマー第二世代のほとんどは，教育戦略を行使する母親とは立場が異なるが，「「資本」の欠落やライフヒストリーにおける喪失，剥奪の経験」という点では共通の特徴を有している。かれらもまた，ある時点において当事者として経験した不安や葛藤や困難を，「「行為者」としての自己を成り立たせてきた資源として意味づけ」，現在そして将来を生き抜く糧としていく。以下の分析では，対象者がどのような「欠落／喪失」を経験し，それをどのように資源化したかをあきらかにしたうえで，資源化のありようが職業志向にどのように結びつくのかについて検討する。

Ⅱ．調査の概要

本稿では, 2015 年 3 月から 2016 年 7 月までにインタビューを実施した 12 名のブラジル系ニューカマー第二世代の女性を対象に分析・考察をおこなう（**付表**）。調査対象者は雪だるま式に増やしていき，インタビューは調査者が対象者の居住地（神奈川県，愛知県，兵庫県，島根県，沖縄県）に赴いて実施した。所要時間は 1 人あたり 2 時間～5 時間半であり，すべて日本語でおこなった。インタビューの進め方としては，来日経緯・滞日歴，学校経験，職業歴，家族関係，交友関係，将来展望などについて基本的な質問項目を準備したうえで，実際のインタビューにおいては質問の順番等にはとくにこだわらず，各項目についてできるだけ自由に語ってもらう半構造化面接の方法をとった。

対象者の年齢は 21～31 歳で, 7 名が既婚者である（パートナーの内訳は，ブラジル人 4 名，日本人 1 名，ドミニカ人 1 名，トーゴ人 1 名）。日本生まれの 1 名を除く 11 名は小学校段階までに来日しており，うち学齢期前の来日は 8 名である。親の来日経緯としては，いわゆる出稼ぎが 10 名，その他（スポーツ指導）が 2 名である。最終学歴は中卒 2 名，高卒 3 名(うち 2 名はブラジルの高校)，専門学校卒 1 名，大学在学中 2 名（うち 1 名はブラジル通信制大学），大学中退 2 名（うち 1 名はブラジルの大学），大卒 2 名であり，中卒の 2 名は，ブラジル政府が在日ブラジル人を対象に毎年 1 回実施している初等中等教育修了資格認定試験（ENCCEJA）による高卒資格取得をめざしている。職業については通訳・翻訳関係 5 名，英会話講師 1 名，多文化市民メディア関係 1 名，旅行関係 1 名，アパレル関係 3 名，ブラジル食品関係 1 名となっており，現段階において工場労働に従事する者はいない。

ここで，対象者の言語習得状況について概観しておこう。まずふまえるべきは対象者の日本語能力の相対的な高さである。比較的難解な漢字の読み書きについては約半数が困難を感じることがあると述べていたが，話したり聞いたりすることにはほとんど不安を感じてはおらず，インタビューはすべて日本語で滞りなく進行した。職業や生活をめぐる親の困難を日本語能力の有無によって説明する者も多く，日本の学校に通った経験を有する第二世代が職業志向を形成する際の前提条件と考えてよいだろう。ただし，小学校低学年で日本を離れブラジルで中学校を卒業した後，再来日後はブラジル人学校に通ったという 1 名は，塾に通ったり接客のアルバイトをあえて選ぶなどして日本語を習得する機会を積極的につくりだしていた。

ポルトガル語に関しては，まったく問題ないと答えた者が 7 名，読み書きにはたまに困難を感じることがあるがあとはほとんど問題ないと答えた者が 4 名，ほとんどできないと答えた者が 1 名であった。習得の場は家庭が中心であるが，教会に通う者にとっては，そこが信仰のみならずポルトガル語習得の場にもなっていた。親が熱心な場合は幼い頃から家庭教師をつけたり，放課後に近隣の

ブラジル人学校に通わせたりするケースもあった。また，一定期間ブラジルに滞在した経験をもつ者は，現地での就学がポルトガル語習得の大きなきっかけとなっていた。ポルトガル語能力の有無はブラジル人との関係を具体的に築けるか否かを左右する重要な条件であるため，第二世代の職業志向に少なからず影響をおよぼすことになる。

その他の言語では英語への関心が高く，実際に英語を操る能力があると答えた者は 5 名いた。そのうち英会話スクールなどの学校外教育機関に通った経験を有する者は 4 名であった。英語習得は実際に高校や大学への進学や就職において有利に働いており，通訳や英会話講師というかたちで，英語を用いること自体を職業としている者もいた。第二世代にとって英語習得は，ライフチャンスを広げるうえでやはり大きな役割を果たすと言えるだろう。

Ⅲ．ブラジル系ニューカマー第一世代の「受け入れの文脈」

まず，ブラジル系ニューカマー第一世代の「受け入れの文脈」を先述した三つの次元に沿って確認しておこう。「移民」という政策用語が存在せず，体系的な移民政策を不要としてきた日本（近藤 2011）において，ブラジル系ニューカマーの入国と就労は，あくまでも公式には「日系人」（という「ネーションフッド」を根拠にカテゴライズされた人びと）が親族を訪問し，日本文化に触れることを目的としたものであり，かならずしも「労働力」の導入として認められたものではなかった。にもかかわらず，かれらがおこなっているのは紛れもなく出稼ぎであるだけでなく，二世以降のエスニシティはむしろ「ブラジル人」であり，法的資格と社会的現実の間に大きな乖離が生じているのが現状である（梶田 2005）。こうした状況下での政府の対応は，ポルテスとルンバウトの分類に則して言えば，排除はしないが積極的に奨励や介入をするわけでもない「消極的受容」（Portes&Rumbaut 2006, p.93）に位置づけることができるだろう。つまり，受け入れはするが，かれらがより多くの資源にアクセスするための積極的な関与はおこなわないということである。

このことは，「受け入れの文脈」の二つ目の次元である労働市場がブラジル系ニューカマーにおよぼす暴力性を増幅させることにつながった。とりわけ 90 年代後半以降，労働市場は利益最大化の論理を貫徹すべく，「フレキシブルな労働力」の確保に力を注いだ。「日系人」労働市場は，まさにそのような論理が剥き出しのかたちで露見する場であり，日系人労働者自身も，それに適応すべく自らの生活を就労中心のものへと編成していった。日系人は，公式には労働者ではない，潜在的なネーションとして相対的に「自由な移動」が可能であったがゆえに，市場の論理は国家の規制を受けることなしに，かれらの移住過程を支配できたのである。その意味で，日系人は「もっともむき出しの形で市場原理に翻弄されて」きた存在と言える（樋口 2005）。

こうした就労の論理に従属した生活様式の形成は，他方で「顔の見えない定住化」という事態をもたらし，日系人は「地域社会で認知可能・理解可能な存在にすらなっていない」と指摘されるようにもなった（丹野 2005）。これは裏を返せば，社会関係資本を蓄積しうるコミュニティの形成がきわめて困難ということであり，「受け入れの文脈」の三つめの次元であるエスニック・コミュニティをほとんどあてにできない状況が依然として続いていることになる。

ただし，このように市場の原理に支配されるかたちで流動性が高く不安定な生活状況を強いられながらも，来日後の地域間移動という点に注目してみれば，家族での移動がほとんどない場合と頻繁である場合とがあり，そのことが第二世代の「欠落／喪失」をめぐる経験のありように大きな影響をおよぼしていた。小学校から高校までの期間にかぎってみると，まったく地域間移動を経験していない者が半数で，残りの半数は複数回の移動を経験しており，多い場合には五つの地域を転々

としていた。しかも，後者の場合は，その間に家族での帰国・再来日が差し挟まれることも多く，第二世代の移動の経験を一層複雑なものにしていた。

Ⅳ．第二世代における「欠落／喪失」の経験と語り直しによる資源化

では，上述したような居住状況は，第二世代の経験のありようにどのような影響をおよぼすのだろうか。居住地の変更は当然のことながら転校をともなう。場合によっては，それが国境を越えるかたちでなされることもある。こうした経験をもつか否かは，第二世代が直面する課題を大きく左右していた。

同一地域での居住は子どもが周囲に持続的な人間関係を築くことを可能にするが，頻繁な移動により居住地が一定しない場合，それはむずかしくなる。前者の場合，第二世代が経験する困難はしばしば，持続する人間関係のなかでの位置取りをめぐって生じていた。そこでは，日本人生徒や他のブラジル人生徒との関係性において自らのエスニシティをどのように認識し呈示するかをめぐって，とりわけエスニシティの欠落が主要な問題とされた。他方，後者の場合，持続的な人間関係自体が成り立たないため，そうした関係性をめぐる問いが前面に出ることはほとんどなかった。むしろ問題とされたのは，移動により学業や進学が妨げられることにより生じる移行過程上の危機であった。ここではそれを継続性の喪失と呼んでおきたい。なお，対象者のなかには学校段階ごとに帰国・再来日の経験をもちながらも，日本では同一地域での居住を続けた者もいた。この対象者が主に語った困難がやはりエスニシティの欠落をめぐるものだったことからしても，日本国内での居住状況が第二世代におよぼす影響は大きいと言えるだろう。

その一方で，今回の調査により浮かびあがったのは，ある時期に強く感じられた欠落感や喪失感も，その後の経験を通じて語り直しに開かれていることだった。そこで以下では，エスニシティの欠落や継続性の喪失は具体的にどのようなかたちで経験されるのかを描いたうえで，それらがそれぞれ，なにを背景にどのような語り直しへと向かうのかを論じていく。

１．エスニシティの欠落とその語り直し

まずはエスニシティをめぐる欠落の語りに注目しよう。この語りには，大きく分けて「日本人性」の欠落に関するものと「ブラジル人性」の欠落に関するものがあった。

(1)「日本人性」の欠落

先行研究において，「日本人性」をめぐる第一世代の経験は「回帰性」という観点から論じられてきた（志水編 2001）。ここでいう「回帰性」とはどちらかと言えば「気分」にかかわる問題であり，出稼ぎという第一目的からすればあくまでも付随的なものとして描かれた。そのため，日本語能力の有無などはその文脈においてさほど重要な意味を付与されてはいなかった。

だが，第二世代にとって状況は大きく異なる。とりわけ本調査のほとんどの対象者のように，日本生まれないし幼少期に来日し，日本の学校教育を受けてきた者たちにとっては，日本語によるコミュニケーションは周囲の日本人と関係を築く際の前提をなすことになる。そのため，周囲の日本人生徒にいかに溶け込むかが学校生活を生き抜くために不可欠な戦略として意識されやすい。言い換えれば，十分な「日本人性」が自らに備わっていないことを自覚しながら，そのギャップを埋めようと必死に試みるのである。

たとえば，BR5は，小学校からブラジル人が一人だけという環境に身をおくことになったが，日本

語が通じないという不安から小3から小5まで，教室で自ら日本語を話すことは皆無だったという。その後，一人の日本人同級生とのかかわりをきっかけとして周囲から日本語を話せる存在として認められるようになり，「みんなと同じ」で「楽になった」。また，学校生活を通じて友達はほとんど日本人だったという BR1 は，自らの中学生時代を振り返り，「当時は，やっぱり日本人っぽくみせることのほうが，自分は気持ちいいというか，よかったですね」と語る。それゆえ，服装なども，「できるだけ日本人の友達に合わせるようにしたり」していたという。BR4 の場合，小5で来日した当初はブラジル人仲間とよく一緒にいたが，ブラジル人が次第に減っていくなか，「（中学）2 年生になってからは，もうちょっと言葉覚えて，日本人の友達をつくって仲間に入ろうとしてた。だから，そのときに髪の毛をストレートにしたりとか」していたと語る。その後，夜間定時制高校に通いはじめてからも，「なんか他の子と似てる姿にしたかったから」頭髪を黒く染めたりもした。また，笑うときの仕草なども，日本人に受け入れられるように真似をしたという。

このように，第二世代にとって「日本人性」の欠落は，なによりも学校での日本人生徒との関係性のなかで強く感じとられ，関係を構築したり維持したりするために自らを変容させるかたちで追求されるものとなる。

(2)「ブラジル人性」の欠落

他方，自らのうちに「ブラジル人性」が欠落していることを問題視するケースもある。今回の対象者のなかでポルトガル語がほとんどできないのは BR3 のみだったが，彼女は，他の誰よりも自らの「ブラジル人性」の欠落に関する悩みを多く語った。生後2ヶ月で来日した BR3 に，ポルトガル語習得のチャンスがなかったわけではない。むしろ，母親は自らが母語教室を運営するほどポルトガル語の継承に熱心であり，小3の頃，BR3 も母親に連れられて毎週土曜日，母語教室に通いはじめた。だが，ポルトガル語もブラジルのこともほとんどわからない彼女は，自分が「一人浮いている」，「仲間に入れない」と感じ，中学校に入るや否や，部活動への参加を理由に引き止める母親を振りほどくようにして母語教室通いをやめた。

だが，そのことは結果として彼女に「ブラジル人性」の欠落を痛感せざるを得ない状況をもたらした。成長すればするほど，ポルトガル語のできない自分だけが家族内の「ブラジル人の輪」に入れないつらさを何度も味わうことになったのである。BR3 には二人の姉がいるが，とりわけブラジル志向が強くポルトガル語も話せる長姉が両親と話す光景は彼女に疎外感をもたらした。

> 両親と一番上の姉がしゃべっている雰囲気とかみると，すごく熱く語っている感じというか雰囲気というか，言葉では言い表せないけど，私はそこに入れない。

「家族のなかに入りたいとか，両親と一緒でありたいという気持ち」は，自分以外の家族が醸しだす「ブラジル人っぽい雰囲気」への「憧れ」として BR3 をとらえ続けた。

ただし，「ブラジル人性」に対する欠落感は，ポルトガル語の未習得によってのみ生じるわけではない。たとえば1歳半で来日した BR2 は，子どもにポルトガル語の読み書きまで習得させたいという母親の意向により，小学校時代は毎日，放課後になると近所のブラジル人学校に通っていた。そのため，幼少期に来日した第二世代としては，人並み以上のポルトガル語能力を有していたと言える。だからこそ，中学校に入ってブラジルを訪問した際，いとこや友人からブラジルのことを知らない者として「外国人扱い」されたことはショックだった。しかし，ブラジルに関する知識の欠如につ

いてはBR2自身も自覚していた。むしろ，ブラジル訪問以上にショックだったのは，中学校に入り，さらに多くの日本人生徒に囲まれるなかで，「日本人性」の欠落を否応なしに意識させられたことである。すなわち，長年日本に暮らし，日本語も日本の文化・習慣も他生徒と同様に身についているとの自覚があるにもかかわらず，外見から「外国人扱い」され，誰からも話しかけられないという経験をはじめてしたのである。そこに先のブラジル訪問での経験も重なり，BR2 は深刻な「アイデンティティ問題」に直面した。そこで彼女が選択したのは，「完璧な外国人」になるために日本人とのつきあいを断つことであった。

ブラジルに行っても外国人扱いされた，日本にいても微妙に外国人扱いされているみたいな，自分の国はどこみたいな感じで。やっぱり日本では言語にも問題ないし，文化もわかっているし，住むに関しては結構問題ないんですけど，やっぱり外見のせいで外国人扱いされる。別に偏見とか差別とかではなくて，普通に外国人として扱われているから，ちょっと一時期かっとなって，それなら完璧な外国人になろうと思って，日本人とのつきあいを全部やめて，本当に外国人だけとつきあうようになって。

そして，学校でも放課後も週末も，もっぱらブラジル人生徒と過ごすようになり，成績も低下していった。

では，日本人との関係を断ち切ることで「完璧な外国人」になれたのかと言えば，ことはそう簡単ではなかった。むしろ，「外国人の輪」に身をおけばおくほど，他のブラジル人生徒と自分とのちがいが際だった。小学校高学年で来日したほとんどの生徒たちは，日本語も十分には理解できず，口をついて出るのは学校や教師や日本人に対する否定的なコメントばかりだった。「別にけんかしたというわけじゃなくて，自分の外国人の部分を探そうという探索のために（日本人と）縁を切った」という BR2 にとって，そうした否定的なコメントはとても共感できるものではなかった。また，多くの生徒は中卒後は帰国を想定しており，日本での大学進学をめざす自分とは「将来の設計図も全然ちがう」と感じざるをえなかった。

(3) 選択された「マイノリティ性」

ところで，「日本人性」や「ブラジル人性」の欠落に向きあうことの帰結は，「日本人性」や「ブラジル人性」の獲得の成否によって判断されるべきものだろうか。そうだとすれば，上に挙げた事例は，すべて「失敗」の物語として描かれることになるだろう。だが実際には，対象者はその「失敗」に踏みとどまっているのではなく，その後の資源獲得や出会いを通じて，「日本人性」や「ブラジル人性」といった概念にはおさまらぬ自らの経験のありようを肯定的に価値づけようとしていた。端的に言えば，日本社会における自らの「マイノリティ性」に積極的な意味を見出そうとしたのである。

BR2は，中2になると日本人生徒との関係を断ち切り，ブラジル人生徒との関係構築を通じて「完璧な外国人」（＝「ブラジル人性」）を追求しようと試みたが，待ち受けていたのはむしろ，自らの生活の基盤が確実に日本にあることの再認識であった。中 3 になる頃には再び日本人生徒ともつきあいはじめ，高校進学をめざして勉強に打ち込んでいった。高校に入る頃には折からの「ハーフブーム」で，外見のちがいは周囲から肯定的なまなざしを受ける対象となった。帰化を迷った時期もあったというが，高 3 の頃には，「顔がガイジンだから，（日本）国籍をとってもいつも「えっ」とい

う反応が嫌で，もう外国人と言った方がスムーズに通るから，その方がいいと思って，もうとらないことに」決めたと語る。あえて「外国人」で居続けることを選択したのである。

あえて帰化しないという選択は，やはり「ブラジル人性」の欠落をめぐって多くの葛藤を経験したBR3によってもなされている。じつは彼女の母親は，言語や文化のちがいで苦労した自らの経験をふまえ，日本に永住する可能性の高い娘が少しでも暮らしやすいようにと彼女に帰化を勧めたことがある。だが，BR3はそれに応じなかった。一つには，彼女自身が「私からブラジル国籍を取ってしまったら，それこそ本当になにかブラジルとのつながりがちょっと薄くなっちゃうんじゃないかと思って」と語るように，ブラジル国籍は自らの「ブラジル性」を確認できるほとんど唯一の資源と考えられているからである。しかし，外見上も言語的にも帰化への壁が低いと思われる BR3 が，母の勧めに抗ってでもブラジル国籍を保持する行為には，単なる「ブラジル人性」の担保を越えて，「日本人性」の欠落をあえて引き受けるという意志が内在している。

> まだ国籍による差別が残ってるんだったら，私が差別される側にいることで，ブラジルの国籍を持ってることで，そのことに関してアンテナをちゃんと張っとけれるなって感じるんですよ。マイノリティの立場でいることをちゃんと持っとかないと，そういうこと，マジョリティのほうに行ったときに，そっちの人たちの気持ちがわからないまま同化していってしまう気がするから，だからあえて残しておきたい。

ポルトガル語がわからないがゆえに家族のなかにいても疎外感を抱き，「両親と一緒でありたい」と切望してきたBR3にとって，「マイノリティの立場」に身をおくことは，なによりも両親と経験を共有することを意味する。母親が懸念する「苦労」は，BR3にとってはむしろ共有したい「苦労」である。言い換えれば，「ブラジル人性」によるつながりがむずかしくとも，「マイノリティ性」により家族と，さらには他の外国人とのつながりを新たに形成していこうとするのである。

帰化の可能性に言及しながらも，マイノリティとして生きてきた経験に即した位置取りをみせるケースもある。BR1 は，中学生の頃は服装など「日本人っぽくみせること」に労力を費やしていたが，「見た目もまったく向こう（ブラジル）の感じ」という外見のちがいを肯定的に受けとめることで，「結構オリジナルじゃないですけど，自分に似合うかに合わないか」を選定の基準にするようになった。「日本人性」にも「ブラジル人性」にも回収されない「オリジナル」への志向は，言い換えれば，両者の「間（はざま）」を生きることに対する積極的な意味付与である。それは服装のみならず，パートナー選択の基準にも反映される。

> （パートナーには）やっぱり自分と同じような状態，環境で育ってきた人が一番合うと思うんですよ。ザ・ブラジル人の人とも気が合わないと思うし，だからと言って，日本人は日本人で，それでも合わないような気がするんですよ。両方の文化をうまく使ってる人がいいと思います。

「間」を生きることへの積極的な意味付与をいっそう明確なかたちでおこなっているのがBR4である。BR4 は「日本人性」の欠落を埋めるべく，中学生の頃から頭髪や仕草など，できるだけ日本人生徒と「似てる姿」にしようと努力してきた。しかし，そのような努力から解放してくれたのが高校卒業後にバイト先で出会った現在の夫であった。夫はブラジルの高校を卒業後，5年間の軍隊生活を経て 20 歳を過ぎてから来日している。「日本人性」の欠落を埋めようとする彼女の努力は，彼

には彼女自身の尊厳を損なうものに感じられた。それを率直に伝える夫のことばは，BR4 に深く響いた。

「あなたはあなたのありのままでいいの。その髪の毛は自分の髪の毛でいいの。自分の目の大きさでいいの。自分の考え方でいいの。ちがう文化でいいの。それでいいの」ってなにかみせてくれたかなって思う。「だから，自分は自分らしく生きていけばいいの」。そうなんだよねって。

夫との出会いにより，彼女は「はじめて，がんばらなくてもいい」と思うことができたと語る。だが，その転換はかならずしも「ブラジル人性」への回帰を意味するものではなかった。むしろ，完璧な「ブラジル人性」の獲得をめざして「がんばらなくてもいい」こともまた，上記の過程で学んだのである。結果として彼女は，「間（はざま）」を生きる存在として自らを認めることに心地よさを感じながら生活している。

いま，どっちもないと思うけどね。なんか純粋なブラジル人でもないし，もちろん日本人でもない。そこの真ん中，どっかの，なんだろう，この二つの文化がちょっと，交わった文化の中にいると思う。でも，これが自分だと思ってるから。なんか両方の国から影響されて，それでいいと思ってる。

２．継続性の喪失とその語り直し

つぎに，継続性の喪失をめぐる経験についてみていこう。エスニシティをめぐる欠落の感覚が，他者との持続的な関係を前提として浮上してくるものなのだとすれば，第一世代の頻繁な移動に第二世代が巻き込まれ，他者と持続的な関係性を築ける状況にさえない場合は，むしろ流動性にいかに向きあうかが大きな課題となる。

（1）頻繁な移動による継続性の喪失

まずは，頻繁な移動を強いられることによる喪失経験のありようをみておこう。対象者のうち，義務教育段階での移動により学業上の困難を経験したのが BR6 と BR9 である。3 歳で来日した BR6 は，19 歳で初めて帰国するまでは日本で過ごした。だが，派遣会社を通じて働く父親の仕事の都合により岐阜県から愛知県への転居，しかも両県内での転居を繰り返し，五つの小学校と二つの中学校を経験している。転校するたびに「ここじゃがんばろう」と思うのだが，度重なる引越で持続的な友情を育むことができず，中 3 の頃には「人とかかわりたくない。友達つくってバイバイするの，もうやだ」と思い友達づくりをあきらめたという。学習意欲は低いわけではなく，中学校にあがった当初は美術大学で学んだり社会科教師になる夢をもっていたのだが，小学校からの度重なる転校で学力はつかず，さらに中学校にあがると学習内容も「一気にレベルが上がった」ため，卒業時の成績は「思い出したくない」ほど悪かった。それでも，中 3 で属していた美術部の教師が BR6 の高校進学を実現しようと美術が学べる私立の女子高に働きかけ，また自宅まで来て母親に説得を試みたという。しかし，その当時は親の仕事が安定せず家計はきわめて苦しい状況にあったため，学費の支払いは期待できず，BR6 自身も家計を助ける必要を感じて，中学校卒業と同時に工場で働きはじめた。

一方，4 歳で来日した BR9 の場合，愛知県内の同一地域に住み，転校することなく小学校に通って

いたが，両親の仕事がうまくいかず，小6の2学期に突然の帰国を余儀なくされた。ブラジルでは公立学校に6年生から入り，日本の中3にあたる8年生まで進んだ。しかし帰国後，父親は貯金を使い果たし，多額の借金を背負ってしまう。その借金をできるだけ早く返済するためには日本で稼ぐ必要があるということで，最初にビザがおりたBR9が，8年生修了を待たずに単身日本へ向かうことになった。ビザも渡日後の仕事もBR9の知らぬところで準備が進んでおり，背中を押されて行くよりほかなかったという。到着後は愛知県に暮らす長兄夫妻のもとに身をよせ，数日もたたぬうちに工場で働きはじめた。

義務教育段階だけでなく，それ以後の移動も，自らが意図したものでない場合は大きな喪失の経験をもたらす。3歳で来日したBR7も，やはり親の仕事の都合で愛知県内での転居を繰り返しており，二つの小学校と二つの中学校を経験している。小4まで通った学校では読書を勧めてくれた教師のおかげで日本語も習得し，成績も「中の上」程度だった。しかし，小5から中2にかけて過ごした地域はブラジル人の非行化も顕著で，親しくなった同級生のブラジル人にもあまり勉強への志向はなかったことに影響され，成績は「中の下」をさらに下回る「下」になってしまったという。だが，幸いなことに中3で転校した中学校の担任が推薦での高校進学を熱心に勧めてくれ，実際に勉強のサポートも丁寧にしてくれたため，公立の商業高校に進学することができた。高校進学を果たしてからは，「あなたは二つの言葉ができるから，それを活かせる仕事をしなさい」という教師のことばにも励まされ，「完全に日本での人生として」自らの将来を思い描くようになった。成績も比較的良好だったため，大学進学にも興味をもちはじめていた。ところが，高校に入った時期はちょうどリーマン・ショック後の不景気に見舞われていた時期であり，父も兄も失職してしまった。購入していた持ち家も売り払い，帰国する運びとなったため，せっかく進学した高校も，2年生にあがったところでやめざるを得なかった。不本意な帰国により日本での進学や就職の夢を断ち切られたことに対する失望は大きく，帰国してしばらくは，「あんたらのせいで私の将来はこうなったんだ」と親に激しく反発し，「家から出たくない状態」になってしまったという。

BR8の場合は逆に，再来日による学業の中断により大きな失望を経験している。2歳で来日したBR8は小2まで日本の学校に通ったが，貯金が十分にできたという親の判断により帰国することになった。帰国後は私立学校に編入し，中学校を卒業する頃には仲のよい同級生との高校進学を予定し，大学に進学し就職活動をしている自分の姿を思い描いたりもしていた。ところがちょうどその頃，再び家族で日本へ出稼ぎに行くという話になり，親に相談されて「行く」とは答えたものの，「自分でいろいろ，次こうしようとかを決めてたやつが，突然反対方向を向いちゃったみたいな感じ」がして自分のなかでの整理がつかず，「普通に家出とかしちゃうぐらい」の喧嘩を頻繁にしたという。結局，中学校を卒業後，家族で日本へ向かうことになった。

(2) 持続するものへの気づき

このように，頻繁な移動はしばしば不本意なかたちで学業の中断をもたらし，第二世代の将来展望を大きく変えてしまう。その結果，早くから就労生活を余儀なくされる者もいれば，移動により将来への見通しを断ち切られた事実をなかなか受けとめられず，親と激しく対立したり絶望感に打ちひしがれる者もいた。そうした状況をその後も解消できないまま，自らも親と同様，あるいはそれ以上に不安定で困難な生活を強いられるケースも少なくあるまい。だが，今回の調査では，その後のさまざまなきっかけや出会いを通じて，移動による継続性の喪失という経験のなかに持続しているものの価値を見出したり，継続性の喪失をもたらす要因としての移動を積極的な意味を有する行為へ

と読み換えたりすることで，自らの経験へのあらたに意味づけをおこなっていた。前者を持続するものへの気づき，後者を移動への適応力と呼び，以下，順に論じていこう。

まずは持続するものへの気づきについてである。ここでは，国内での転居・転校の回数が際だって多い BR6 の事例を取りあげたい。困窮する家族を助けようと高校進学を断念し，中学校卒業と同時に働くことにした BR6 は，しばらく携帯電話や自動車部品の工場でのアルバイトを転々とした後，その後 4 年ほど勤務することになる電気製品の工場で働きはじめた。その職場では外国人女性労働者 50 人弱のリーダーを任せられるまでになり，年長者への対応には苦労したが，リーダーとしての適切な話し方など学ぶところも多かったという。だが，その間にも学業継続への意欲は衰えることはなかった。17 歳になると，あるブラジル人男性と親しくなったが，親に大反対され家を出た。それをきっかけに，大学進学に向けた資金獲得に専念することになった。

だが, 18 歳のとき，その男性との間の息子を妊娠，そして出産という想定外の出来事が生じる。しかも男性は「逃げたみたいな感じ」で姿をくらませてしまったため，シングルマザーとして子育てせざるを得なくなってしまった。もともと帰国願望の強かった母親は，姉と弟を連れて息子が生後 1 ヶ月になる頃に帰国してしまった。このまま日本にいては子育てしながら仕事や学業を進めていくことは困難だと判断した BR6 は, 3 ヶ月の息子を抱え，母親のサポートを求めブラジルへ向かった。

その際, BR6 には目標があった。ブラジルで働きながら大学進学を果たし，卒業後は日本へ戻るということである。幸い時間を経ずして日系企業に通訳秘書の職を得ることができた。そこで 17 時まで働いた後，19 時からはスプレチーボに通い，まずは高校卒業資格の取得に向けて基礎的なところから勉強をはじめた。だが，仕事をして得られる給料は満足のゆくものではなく，スプレチーボでの教師の教え方や熱意のなさにも失望するばかりであった。路上で強盗の被害にも遭った。こうした経済的・文化的・社会的現実を目の当たりにして，ブラジルには「住めない」と判断し, 2 年滞在の後には，当初の予定を大幅に早めて再び日本へ戻ってきた。

だが, BR6 はブラジル滞在をけっして悔いてはいない。逆に，その経験こそがものの見方を大きく変え，その後の道筋を照らしてくれたことを強調する。すなわち，ブラジルに滞在する経験を通じてはじめて，自らがいかなる状況のもとで社会化されてきたかを再認識し，めざすべき目標が明確になったと語るのである。

> ブラジルに 1 回も行かないでずっと日本におったら，今の考え方なかったと思う。やっぱりほかの文化見るのは大事。（中略）ブラジル行って，「ああ，こうなんだ」って見て，自分が本当に何をしたいか，どういうのが私に合ってるかっていうの，やっとわかってきたから。どんだけ私たちが文化に結ばれてるかっていうのがやっと見える。ほかの文化を見ると，どんだけ自分がその文化にあてはまるか，あてはまらないかっていうの，やっぱり見えてくると思うんだよね。

ここで BR6 は，幼少期から日本で育ち，その中でさまざまなものを身につけてきたという事実をあらためて発見している。すなわち，度重なる移動や不安定な経済状況のなかで断片化されたように感じられていた自らの人生経歴のなかに，持続しているものをはじめて意識化しえたのである。

では，彼女はなにを持続しているものととらえたのだろうか。それを，たとえば内面化された「日本文化」といった観点から理解するのは，以下の語りからして妥当とは言えまい。

> うちらの場合は，やっぱ文化におさまってないから，一つの文化だけに。結構，日本で育った

んだけどブラジル人。だで，私日本人って感じがしない。でも，ブラジル行くと，ブラジルで育ってないから，ブラジル人の文化も頭に入ってない。ちょっと別次元におるみたいな感じなんだよね。それで，たぶん，なんでも頭には簡単には入りやすいし，わかりやすくはなると思う。

それより，BR6が強調するのはむしろ，自らが日本で成長する過程で，学ぶことの価値に気づける環境が存在し続けたことの意味であった。ブラジルに暮らして気づいたのは，貧困層へのサポート不足ゆえに多くの人びとが思うような教育を受けられない現状であり，また，それ以上に，問題の多い現状以外を想像できない人びとのありようだった。「ほかの環境を知らないと，やっぱりその環境を欲しがらないじゃないですか」とブラジルの現状を語る BR6 の言葉は，そのまま自らの経験，とりわけ家庭の教育環境に関する理解へと結びついていく。先に，中 3 のときに教師が自宅にまで足を運び，母親に BR6 の高校進学について説得を試みたが，結局断念せざるをえなかった経緯を描いた。その際，断念の背景として経済的理由を挙げたが，じつはブラジル滞在を経た BR6 には，それ以外の背景も見えている。すなわち，学校に通った経験を十分にもたない親（父親は中卒，母親は小学校未修了）にとって，高校進学の意味を理解するのはきわめてむずかしかったのだろうということである。

うちのお母さんはさ，うちの先生が話したこと，わかってなかったんだよ。いくら聞いてもわかってなかったの。だで，わかっていれば，そこは変わると思う。いや，もう絶対（高校へ）送らなきゃいけないなって。

結果的に高校進学は断念したが，教師が学びを続けることの重要性について熱心に働きかけてくれたこと自体は，学びに価値をおく態度の形成に確実に影響をおよぼしたと考えており，そうした「かかわり合いがあったからこそ見えた」と語る。継続性を喪失する経験をもつからこそ，持続するものの価値がより強く意識されるのだと言えよう。

（3）移動への適応力

つぎに，不本意な移動により学業中断の危機にさらされ，一度は将来への見通しを失いながらも，移動先での経験を通じてさまざまな資源を獲得し，移動する生活への適応力を身につけていく事例をみてみよう。

高校進学を前にしての渡日に絶望感を抱いていた BR8 ではあったが，日本に行くのが避けられないのであれば日本の高校に通って日本語を習得し，大学にも進学したいと考えていた。だが，日本には長く滞在せずにできるだけ早く帰国するという親の意向により，ブラジル人学校に通うことになった。しかし，その学校の高等部に 6 ヶ月ほど通ったところで，親の仕事の都合により転居することになり，別のブラジル人学校に入り直した。その学校で高 1 から卒業まで過ごした後は，日本の大学に入ろうとも考えたが，学びたい内容が学べること，日本で資格取得すれば帰国後の就職に有利なこと，学習してきた日本語を活かせることなどを勘案して，服飾系の専門学校に進学した。学費は親に頼らず，奨学金とファストフード店でのアルバイト代により捻出した。外国人ゆえに接し方がちがったり，わからないと思われるのが「すごく嫌」だったので，教室のなかでは自分のなかに「特別ではないという仕切り」をつくっていた。グループ活動などでどうしてもわからない場合は，必ず聞いて失敗しないようにした。

じつは BR8 は，高３の時点で親から，卒業後は短期間集中して働いて帰国するか，もしくは日本で勉強して働くかの選択を迫られていた。工場労働でいつも疲れて不満そうな親の姿を見ていた BR8 は，工場でだけは働きたくないと思い，日本での進学という「面倒くさいほう」を選択する。そのためには十分な日本語能力が必要となるが，ブラジル人学校の日本語指導だけでは不十分だったため，放課後には公文に通い，高卒後１年間の間には日本語能力試験の２級に合格している。日本語習得について言えば，16 歳から 7 年間続けたファストフード店のアルバイトも，金銭面よりもむしろ「日本語を覚えようと思って」はじめたのだった。

専門学校を卒業した後は，学校で身につけた縫製およびデザインの技術と英語力が買われてアパレル関連企業に正社員として採用され，資材発注などの仕事に携わった。だが，不況により給料の未払いが生じたため，別のアパレル関連企業に転職したところである。この場合も，服飾の知識のほかに英語とスペイン語の能力を買われての採用であった。現在は販売員兼マネージャー候補として職場でも期待されている。英語にしてもスペイン語にしても，ブラジルにいる頃から学校で基礎を学んでいるだけで，特別な教育機関等に通った経験はない。現在は，職場での必要に迫られて，英語を必死で勉強しているのが現状である。

> 日本に戻ってきました。なら日本語覚えないといけないよね。日本語，勉強します。つぎの会社，英語わかんないといけない。英語，勉強します。単純です。これ，やらないといけない。なら，がんばって勉強するみたいな。

このような，必要なことは移動先で学び，身につけるという態度は，幼い頃からの頻繁な移動経験のなかで身についた適応力であることを，BR8 自身は明確に自覚し，つぎのように語る。

> ちっちゃい頃から移動が多かったんで，引っ越し。だから，そんなに場所に愛着がないってわけじゃないんですけども，どこに行っても成り立つかなと思ったぐらいで。あっちで働いて，こっちで働いてっていっても，最初はしんどくても，あとあと自分でなんとかできるっていうのは，強い。

渡日が決まった当初は将来が見通せなくなったことに絶望感を抱いた BR8 だったが，移動先の日本で学びたいことを学び，就きたい仕事に就けているという手応えを感じられる現在，「自分の方向性に関しては，こっちに来てすごくよかった」と，再来日に対して「逆に感謝している」と語っている。

Ⅴ．「欠落／喪失」の語り直しと媒介型の職業志向

第二世代が「欠落／喪失」の経験をいかに語り直すかは，自らの将来をいかに展望するか，とりわけどのような職業を志向するかということと密接に結びついている。本稿の対象者のほとんどは，出稼ぎ労働者として工場や建設現場で働く親の姿を見て育ち，また，少なくとも半数は自らも工場労働に従事した経験をもつ。しかし，調査時点で工場労働に従事する者は皆無であり，第一世代と比較して確実に職業選択の幅を広げていた。現在就いている職業を「欠落／喪失」の経験の語り直しの結果として論じることも考えらないではないが，現在の職業達成がかならずしも本人の希望を反映しているとはかぎらないだろう。そこで，ここではむしろ，現在の職業をも踏まえて将来の職業を

どのように志向するかの方が語り直しの意義をより明確に反映するものととらえ，語り直しの型と職業志向との関連について検討することにする。

ここで，結論を先取りするかたちで，対象者が志向する職業の傾向について触れておこう。先述した通り，対象者の多くは，「欠落／喪失」を語り直す過程で「間」を生きることへの積極的な意味付与をおこなうようになっていた。かれらの職業志向は，程度の差はあれ，そのような構えを反映するものとなっている。すなわち，「間」に立つことがなんらかの社会的機能を果たすような職業を志向する傾向が強いのである。それをここでは媒介型の職業志向と呼ぶことにしよう。

前節では，語り直しの型を，選択された「マイノリティ性」，持続するものへの気づき，移動への適応力の三つに分類したが，じつはどの型をとるにせよ，媒介型の職業志向を有していることには変わりなかった。ただし，具体的な職業内容については，語り直しの型がそれぞれ関係性（選択された「マイノリティ性」），時間性（持続するものへの気づき），空間性（移動への適応力）を強調したものであることに応じて，「住民媒介型」「世代媒介型」「空間媒介型」の三つに大別できた。広く言えば「住民媒介型」と「世代媒介型」はいずれも関係媒介型の職業志向であると言えるが，後者には次世代を育成するという時間的な要素が強く入ってくるため，このように区別した。また「空間媒介型」については，他の二つが定住志向を有する者に共通してみられる職業志向であるのに対して，複数国を視野に入れながらキャリア形成を志向する者に特徴的にみられるものであった。

以下ではそれらの対応について事例を挙げながら論じていくが，BR5 や BR9 のように，「欠落／喪失」の経験をめぐっていまだ安定した語り直しの型をもつにいたらず，将来の居住地について曖昧なイメージしか描けない場合は，職業志向もきわめて不安定であることをここで確認しておきたい。両者とも「間」を生きる感覚について語ってはいるが，「ばらばら」（BR9），「バランスがむずかしい」（BR5）など，どちらかと言えば消極的な内容となっている。

１．住民媒介型の職業志向

選択された「マイノリティ性」というかたちで語り直しをおこない，かつ定住志向の強い者に特徴的なのが住民媒介型の職業志向を有していることである。すなわち，身体的特徴や言語や文化の側面で自らがマイノリティであることを積極的に引き受け，同様にそうした側面でのサポートを必要とする住民と関わる職業を模索するのである。以下では，公共機関における外国人相談窓口を担当したいという BR2 と通訳職への夢を語る BR1 の事例をみてみよう。

BR2 は高校卒業後，AO 入試で合格した私立大学に進学した，AO 入試では，日本語，ポルトガル語そして 12 歳からスクールに通って習得した英語の三つの言語を操れることと，通っていた商業高校で多くの資格を取得したことがアピール・ポイントとなった。現在は文学部英文学科の 4 年生であり，奨学金を受けて学業に励む一方で，国際交流協会の相談窓口においてポルトガル語と英語の通訳のアルバイトをしている。日本での生活全般に関する問い合わせ，法律相談，留学に関する質問など，相談内容は多岐にわたるが，すでに 3 年目に入り要領もつかめているため，深刻な相談以外はできるかぎり自分で処理するようにしている。アルバイトではあるが，単なる通訳を越えた業務をこなしていると言えるだろう。BR2 自身，この仕事には「すごくやりがいを感じて」おり，「学ぶところも多くて，すごく自分にとっていいところになっています，いろいろと」と語る。そして，まさに就職活動の真っ只中にある現在，そのアルバイトでやっているような外国人をサポートする「ソーシャルワーカー的な仕事」に就いて正規の職員として働ければ理想的であると考え，情報を集めているところである。すでに帰化しているアルゼンチン出身の日系男性と数年のうちに結婚する予

定であり，「自分の国ではない」としか感じられないブラジルよりも，「外国人扱いされるのはしょうがないことというのを理解して乗り切るしかない」という覚悟で日本に住み続けたいと考えている。

BR1 の場合，就学状況をみるときわめて頻繁な移動を経験していることがわかる。しかも小学校から高校までの各学校段階で 1 回ずつの国家間移動をともなっており，継続性に関して大きな喪失感を経験していても不思議ではない。ところが，少なくとも彼女の語りのなかで継続性の喪失が大きな位置を占めることはなく，むしろ「日本人性」の喪失を問題として経験していた。この背景には，移動が繰り返されながらも，日本での居住が同一地域でなされたことがあるものと考えられる。実際，出入りを繰り返しながらも，小学校から高校を卒業するまで同一地域の学校に通っており，現在まで交友関係を維持している。高校を卒業してからも，1 年間おにぎり屋でアルバイトした後，家族で帰国したが，翌年再び同一地域に戻ってきている。その後は，派遣会社を介して自動車部品工場で働いたが，1 ヶ月ごとの更新で，翌月も更新されるかどうかわからないような「ぎりぎりの状態」だったため 6 ヶ月で辞め，母親の知り合いの紹介でブラジル食材メーカーの営業職に就いた。前職と比べ給料は低いが，正社員としての直接雇用である。この職場はブラジル人相手のコミュニケーションが必要とされる。言語的には問題ないのだが，一般的にブラジル人が興味をもつ話題に興味も知識ももちあわせていないので，慣れるまで苦労したという。さらに，「4 年やってても，自分には合わないなって思うときの方が多い」とも語り，転職についてもよく考えるという。その際には，日本語とポルトガル語の能力を活かして「通訳の仕事だったりとか，そういう感じの仕事の方がやりやすいんじゃないか」と考えているが，これは，現職のように「ブラジル人性」が前提とされ，求められるブラジル人同士のコミュニケーションよりも，ブラジル人と日本人を媒介する立場にあることに居心地のよさを感じるという「間」感覚をもつがゆえの職業志向と言えるだろう。だがその一方で BR1 は，「本格的にやるってなると，やっぱり資格を取ったりとかっていうふうになるので，そういう面でいうと，自分のレベルがそこまで行くのかなって思うときがありますね」と自らの言語能力に対する不安を語っており，転職への一歩をなかなか踏みだせないでいるのが現状である。

２．世代媒介型の職業志向

人生経歴における継続性の喪失を持続するものへの気づきというかたちでとらえ直し，かつ定住志向を明確にもつ者には，世代媒介型の職業志向がみられた。すなわち，教育に熱心とはいえない親のもとで学業の中断を余儀なくされながらも，自らの内に学びを価値あるものとする態度が持続していることへの気づきは，そのような態度の形成・維持を可能にする環境が個々の家庭を越えて存在することの必要性へと目を向けさせる。そして，日本人とも第一世代とも異なる第二世代に固有の立ち位置から，次世代の学びを支えられるような職業を模索するのである。以下では，外国人の子どものための学校外教育施設の設立を構想する BR6 の事例をみてみよう。

出産をきっかけに 19 歳でブラジルへ渡り，高卒資格を取得して大学に進学することを予定していた BR6 だったが，ブラジル社会のありように馴染めず，2 年後には日本での生活を再開した。当初は事務職を希望していたが，リーマン・ショック直後でよい職は見つからず，結局，工場を転々としながら働くしかなかった。なかでも弁当工場は長時間労働を強いられる激務であり，「機械みたいな感じ」で働いて食欲もなくすほどだったという。そうして得た収入のうち毎月 8〜10 万円を育児費用としてブラジルの母親のもとに送金した。

そのような生活で 4 年ほど経過した頃，友人から区役所で通訳を求めているという話を聞いた。

ブラジルで日系企業の通訳秘書を務めていた経験もあったので，すぐに紹介してもらった。工場は辞めたが，不定期で労働時間も短い通訳だけでは生活していけないため，宅配便サービスの会社などでのアルバイトも平行しておこなった。1年経ってようやく落ち着いてきた頃，母親に預けていた息子が姿をくらましていた男性（息子の父親）に連れ去られるという事件が生じる。息子を取り戻すための裁判が必要となったため，仕事はすべて辞めてブラジルへ渡った（裁判は継続中）。6ヶ月のブラジル滞在を終えて再び日本に来てからは，在日ブラジル人向けの雑誌の求人情報などを参考に20社ほどに履歴書を送り，主にブラジルを扱う旅行会社から返事がきた。日本語とポルトガル語の読み書きができ，スペイン語もそれなりに理解できることから即座に採用が決まったという。最初の6ヶ月は正社員で給料も月に30万円ほどもらえていたが，社長の交代により雇用形態がアルバイトに変わり，月々の収入も半減してしまった。それでも，幅広く学べるこの職場が「めっちゃ好き」で，辞めずに働き続け，さらに6ヶ月が経過したところである。

このように現職への満足感は高いが，いつもまでもとどまるつもりはない。目標は別のところにあるからだ。端的に言えば，日本の学校に通う外国人の子どもが，「自分のスペース」と感じながら学ぶことに価値を見出せるような教育施設をつくりたいのである。そこではまず，日本語や学校の勉強をサポートすることにより，学びの継続性を確保することがめざされる。家庭の教育環境に左右され，学ぶことに価値を見出す機会もないまま不本意なかたちで離学が生じるのを食いとめたいからである。

学校続けない子っていうのはさ，やっぱりいじめとか，あと，家庭でも学校の勉強がサポートなくって，頭が悪いって思われて仲間はずれにされるっていうのが多いじゃないですか。そういう子どもたちのサポートをしていきたい。

また，子どもをサポートするには，親自身に教育の重要性を伝えることも欠かせないと考え，親の参加機会も積極的につくっていきたいという。

子どもはやっぱ勉強。それを親に教えなきゃいけない。子どもに教えようとしてもだめだから，そこのサポートは大事だと思う。だで，うちの学校も親と子どもの触れ合いもつくっていこうって思ってるから，やっぱり親と子どもが同時に，一緒に考えると，やっぱ親も大事にしてくるから。こっちに来る外国人は簡単なもの探してくるからさ。自分の子どもたちの環境とか，そこまで深く考えてないのよ。あと，自分の子どもたちがどこまでいってほしいかっていうのも，すごい深く考えてない。ただ，学校行ければＯＫみたいな感覚が多いっていうの，気づいたんだよね。それを変えなきゃいけないと思う。

ただし，このように学びをサポートしつつ，同時に学ぶことの価値を伝える教育施設の設立をめざすことは，日本の学校教育の単なる補完機能を担うということを意味しない。BR6がなによりもめざすのは，むしろ，文化的に「別次元」に生きることを積極的に評価し，「日本文化」にも「ブラジル文化」にも同化し得ないことの可能性を最大限に育てていくことである。

（私たちみたいな子どもは）文化にあてはまらないんだわ。たとえば，日本じゃ自分の文化につながっとる。ブラジル人は自分の文化につながってる。これ，日本で育ってる子っていうのは文

化がないんだわ。両方の文化が入って，頭がすごい幅が大きいんだわ。いろいろ簡単に聞き取れる。そこがすごくいいと思う。（中略）一つの文化につながらない。いろんな文化が入っても，それを受けやすくなるような人になるもんで，頭がすごいもう，本当に世界にまわってるみたいな感じ。言い方が合ってるかどうかはよくわかんないんですけど。私が好きなのはそこなんだわ。そういう子どもをつくっていきたいんだ。

「文化にあてはまらない」子どもはブラジルにルーツをもつ子どもにかぎらない。BR6 は，外国にルーツをもつ多様な子どもに開かれた場づくりをめざしており，スタッフも各国の教師を採用するつもりである。また，自らも多様な子どもに対応できるよう，長期休暇には海外に飛んでボランティア活動などを経験しながら，各国の事情を学びたいと考えている。

彼女自身は，自らが直接教育に携わるより，そのような教育施設の運営を担うつもりでいる。そのために必要な知識を学ぶため，ブラジルの通信制教育で経営学を学びたいと考えているが，それには高卒資格が必要となるため，ブラジル政府が年 1 回実施する ENCCEJA でそれを取得すべく，仕事の傍ら勉強に励む毎日である。また，大卒資格を取得には一定期間のインターンシップが必要とされるが，現在の職場にいればそれが見込めるため，少なくとも大学が修了するまでは今の仕事を続けようと思っている。

３．空間媒介型の職業志向

継続性の喪失が，その後の複数言語の獲得や技能習得，あるいはその結果として生じる「なんとかできる」という実感の積み重ねなどを通じて，移動への適応力の獲得として語り直される場合，特定の場所にこだわらず，むしろ複数の国を同時に視野に入れながら自らの働き方を模索する傾向がある。このような空間媒介型の職業志向の事例として，まずは BR8 の事例をみていこう。

アパレル関連企業で働く BR8 は，複数言語を操れる販売員兼マネージャーとして期待され，本人もその期待に応えるべく言語能力を日々磨くことに余念がない。だが，これは BR8 にとっては，社員としての責任を果たすということ以上に，今後も生じうる移動に備える，あるいは，よりよいかたちでの移動を実現するために，移動への適応力をより強化する実践でもある。

実際，現在の職場は好きでやりがいを感じてもおり，英語能力を磨いたり日本語の敬語表現を習得するにはよい環境にあるが，そこで働き続けるつもりはない。目標は独立して自分なりの事業を展開することであり，現在はそのための知識を得るための準備期間と考え，５年間は働く予定でいる。独立後の事業内容についてはまだ模索中であるが，経験上，洋服関係の仕事は収益率が低いと感じているため，それ以外のものを考えている。

具体的な事業内容はともかく，BR8 が重視するのは，独立して場所の縛りなく働ける環境に身をおくことである。

独立して日本にいなくても成り立つ仕事をなにかやりたい。なにか，どこの国にいても成り立つ仕事。パソコンだけじゃないですけども，そういう仕事をしたい。一定のとこにいなくても。日本に会社があるけども，ブラジルにいて運営ができるであったり，そういうことしたい。

日本は便利で生活水準が高いとは思うが，日本社会に入り込めばこむほど違和感を感じる場面（会社での上下関係，外見から日本語がわからないと思い込まれる等）も多くなり，永住には躊躇す

る。他方，人の陽気さが好きだから「ブラジル人でいたい」とは思いながらも，治安や就職事情の深刻さを考えると，ブラジルには一生は住めないと思ってしまう。永住したいと思える国の一つは，オーストラリアである。オーストラリアには，気候もよく，仕事さえあれば生活水準も保てるイメージがあるためである。

その実現可能性はともかく，このように複数国での居住可能性を考慮しながらの職業志向の背後にあるのは，一つには，移動のなかで，十分とは言えないにせよ複数の言語を習得したことへの価値づけである。

> なんか，半分半分だからこそ（居住国を）選べるんじゃないかなっていうのはある。あっち（ブラジル）に行って半分，7年住んで，こっち（日本）に何年か住んで，両方，まあまあしゃべれて。

だが，そのさらに背後にあるのは，移動への適応力を，楽しみながら，より強靭なものにしていこうとする BR8 の意志である。

> なんか，ゼロからはじまるの楽しくないですか。自分でものすごく努力して，なにかやらないといけないというのが楽しい。なんか脳みそをこう絞って絞って，どこまで，限界まで行けるのかがいい。

Ⅵ．まとめと考察

本稿では，ブラジル系ニューカマー第二世代の職業への志向がどのように形成されるのかについて，当事者へのライフストーリー・インタビューの結果をもとに検討した。以下，分析により得られた知見をまとめ，そこから浮かびあがる課題について考察したい。

まず，ブラジル系ニューカマー第二世代は成長の過程で，二つの型に大別される「欠落／喪失」の経験をしていた。一つはエスニシティの欠落であり，もう一つは継続性の喪失である。前者はさらに「日本人性」をめぐる欠落と「ブラジル人性」をめぐる欠落に分類されるが，いずれにせよ，「欠落／喪失」をめぐる二つの型は，概ね日本国内における居住地の数の多寡と密接な関連がみられた。すなわち，エスニシティに関する欠落感を経験している者は，少なくとも小学校から高校までは同一地域に居住していた。また，BR1 のように途中で複数回のブラジル滞在経験を有している者であっても，日本では常に同一地域で生活をしている場合は，同様の傾向がみられた。他方，継続性に関する喪失感を経験している者は，日本国内で居住地が複数回変わっており，それにブラジル滞在経験が加わることも多かった。

こうした居住状況のちがいが「欠落／喪失」の経験に与える影響は小さくないだろう。たとえば，同一地域での生活が続けば，それなりに持続性のある人間関係のなかに身をおくことになる。エスニシティに関する欠落感は，そうした持続的な人間関係のなかで自らの位置を探る過程で生じるものと考えられる。実際，本稿の対象者にしても，とりわけ「日本人性」に関する欠落の経験は，学校生活における同級生との間の位置取りの問題として生じていた。もっとも，小学校から高校まで同一地域に住み続け，日本の学校に通い続けていても，BR12 のようにエスニシティに関する欠落感をとくに経験しないケースもある。これは，BR12 がブラジル人の集住する地域に暮らし，近隣に暮らす親戚やいとことの関係も密ななかで，日本人とのかかわりよりも「親近感が湧く」ブラジル人と

のつきあいを優先して生活できたことが影響しているものと考えられる。

他方，頻繁な地域間移動を余儀なくされる場合，持続的な人間関係を築くのはきわめてむずかしくなり，BR6 のように，むしろ人間関係を築くことそのものをあきらめるという事態も生じていた。このように持続的な人間関係が困難な状況下ではエスニシティをめぐる葛藤さえも生じにくく，むしろ移動にともなう学業継続上の困難，すなわち継続性の喪失が切実な問題として経験されることになる。

だが，こうして生じた「欠落／喪失」の経験に対するその後の語り直しのありようが，将来の職業志向の形成と深く関連するというのが本研究のもう一つの知見である。語り直しの型に沿って順に整理していこう。

まずは，エスニシティの欠落に対する語り直しについてである。エスニシティにかかわる欠落感は，自らの異質性や「間」感覚への積極的な意味付与というかたちで語り直された。すなわち，自らが「マイノリティ性」を有することを積極的に引き受けることにより，その立場を有効に利用しうる職業志向がなされる傾向がみられた。住民媒介型の職業志向がそれであり，とりわけ明確な定住希望をもち，少なくとも日本語とポルトガル語の両方を操れる場合，通訳や相談窓口担当のようなかたちで外国人住民と日本社会を媒介する職業を希望していた。ただし，日本語しか習得しておらず言語的に人びとを媒介することができない BR3 のようなケースもある。そのことで BR3 は，伝えたい人びとに「自分の胸のうちを言うのが得意ではなかった」が，地域における多文化活動への参加を通じて映像による表現方法を学び，それによって言語を越えて人びととつながれることを実感した。「それ（映像制作）をいつか仕事にして，自分が思っていることとかを映画館とかで上映できるような人になれたら」という BR3 の職業志向も，広い意味で住民媒介型と言えるだろう。

継続性の喪失に対しては，一方では継続性を失うことで経験の断片化を強いられる状況にありながらも自らの内に持続するものへの気づきとして，他方では移動という行為に対する意味の読み換えによる移動への適応力の自覚として語り直しがなされた。頻繁な移動による学業の中断や進学の断念にもかかわらず，学びを価値あるものとみなす態度が自らの内に形成・維持されていることの気づきは，そのような態度の形成に他者からの働きかけが深くかかわっていることへの認識を同時にもたらしていた。そのような働きかけが偶然ではなく，外国人であるという必然性においてなされる必要があると認識され，また，第二世代ゆえに可能な学びの支え方があると実感されるとき，世代媒介型の職業志向が生みだされていた。他方で，移動する生活が複数言語の獲得や普遍性を有する技能の習得に結びつき，どこにいても「なんとかやっていける」という実感を生むとき，継続性の喪失の経験は，移動への適応力の獲得過程として語り直される。移動への適応力は，複数国を同時に見据えた空間媒介型の職業志向の基礎となっていた。

では，以上の知見からどのような課題が浮かびあがるだろうか。以下，第二世代の職業志向にかかわる場のありようという観点から 2 点ほど論じておきたい

第一に，本稿では主に，「欠落／喪失」の経験についてなんらかのかたちで語り直しをなしえた事例を扱ってきた。それは，裏を返せば，そうした語り直しができない場合，自らの将来について具体的な展望をもつことはきわめてむずかしいかもしれないということである。実際，BR5 や BR9 のように，「欠落／喪失」の経験をもちながらも，それを相対化できる程度に語り直す契機をもたない場合，安定した自己認識を欠き，一貫性のある職業志向をもてないでいた。BR5 は日本とブラジルの間で「バランス」を取ることにむずかしさを感じており，日本では通訳・翻訳の仕事に従事する一方で，帰国するのであれば歌手になりたいと語る。また，BR9 は自らの状況を「ばらばらで困ってる」

と語り，希望する職業として獣医，美容関係，ツアーガイドなどさまざまなものをあげ，「将来なにになるのかわかんない」としている。ただし，2 人の語りからは，現職の経験が自らの経験を秩序づける契機となる可能性も伺われた。BR5 は，高卒後は工場で働いた経験しかなかったが，登録している派遣会社からの紹介で 7 ヶ月前から小中学校での通訳・翻訳の仕事をはじめることにより，「やっと自分に合った仕事を見つけることができた」と感じているという。10 代半ばからいくつもの工場を転々としてきた BR9 の場合，知り合った日本人女性が運営する多文化市民メディアのスタッフに採用され，ブラジル文化を紹介する役割を担うことで，自らの経験と向きあいつつある。これらのことが直ちに語り直しを可能にするわけではないにせよ，少なくともそうした可能性につながりうる環境が，さまざまなかたちで継続的に存在できるように，適切な支援のありようを考える必要があるだろう。

第二に，今後のニューカマーの子どもの教育にかかわってとくに注目したいのが，第二世代にみられる世代媒介型の職業志向である。自らが「子ども」として学校教育を受けた，あるいは断念した経験をもつ第二世代が，どのような経験を経て，なにを課題として抱きながら次世代の教育に携わろうとしているのかに，まずは真摯に耳を傾ける必要がある。マイノリティとして経験してきたことを言語化し，次世代に向かって語りかける場が必要であることを，第二世代として生きた立場から自らの責務として考え，そうした場づくりを実践していこうとしていることの意義をしっかりと見据える必要があるだろう。

たとえば BR7 は現在，「多文化サポーター」として小中学校に入り，翻訳・通訳やブラジル人の学習サポートをおこなっているが，彼女からみればあきらかに言語的・文化的なサポートを要する問題が教師には学習障害や発達障害とみなされることに大きな違和感を感じている。しかし，立場上それについて意見を述べることはむずかしく，またそのような場も設けられないことに歯がゆさを感じている。また，帰国志向でとくに世代媒介型の職業志向を語っているわけではないが，BR7 と同様の立場で小中学校に入っている BR12 は，高校に通った自らの経験をブラジル人中学生にポルトガル語で伝えることで，高校進学のサポートをしたいと考えているのだが，中学校での仕事は翻訳に限定されており，中学生と接触する機会もないことにもどかしさを感じている。これらの事例では，第二世代によってこそ切り開かれる学びの可能性がまったく考慮されていないと言わざるをえない。多文化性にもとづき職を設けることの意味と可能性を十分に認識し，次世代の教育にかかわろうとする第二世代の可能性を阻害しない環境をつくることは，学校内外において大きな課題と言えるだろう。

＜参考文献＞

樋口直人　2005,「共生から統合へ―権利保障と移民コミュニティの相互強化に向けて」梶田孝道・丹野清人・樋口直人『顔の見えない定住化―日系ブラジル人と国家・市場・移民ネットワーク』名古屋大学出版会,pp.285-305.

樋口直人　2010,「経済危機と在日ブラジル人―なにが大量失業・帰国をもたらしたのか」『大原社会問題研究所雑誌』622,pp.50-66.

梶田孝道　2005,「国民国家の境界と日系人カテゴリーの形成―1990 年入管法改定をめぐって」梶田孝道・丹野清人・樋口直人『顔の見えない定住化―日系ブラジル人と国家・市場・移民ネットワーク』名古屋大学出版会,pp.108-137.

児島明　2008,「在日ブラジル人の若者の進路選択過程―学校からの離脱／就労への水路づけ」『和光

大学現代人間学部紀要』第 1 号, pp.55-72.
近藤敦 2011,「多文化共生政策とは何か」近藤敦編『多文化共生政策へのアプローチ』明石書店, pp.3-14.
野入直美　2014,「アメラジアンの子どもを育てるということ―日本人の母親によって経験された相互行為」『異文化間教育』第 39 号, pp.33-50.
Portes, A. and R.G.Rumbaut,　2006, *Immigrant America: A Portrait*（Third Edition）, University of California Press.
Portes, A. and R.G.Rumbaut, 2001, *Legacies: The Story of the Immigrant Second Generation,* New York: Russell Sage Foundation.（＝2014,村井忠政他訳『現代アメリカ移民第二世代の研究－移民排斥と同化主義に代わる「第三の道」』明石書店.）
志水宏吉・清水睦美編　2001,『ニューカマーと教育―学校文化とエスニシティの葛藤をめぐって』明石書店.
丹野清人　2005,「市場と地域社会の相克―社会問題の発生メカニズム」梶田孝道・丹野清人・樋口直人『顔の見えない定住化―日系ブラジル人と国家・市場・移民ネットワーク』名古屋大学出版会, pp.240-258.

付記　本研究は，平成 26～29 年度科学研究費補助金（基盤研究（B））「ニューカマー第二世代の義務教育卒業後のライフコースと次世代形成にかかわる総合的調査」（課題番号 26285193，研究代表者：角替弘規）による研究成果の一部である。

（2016 年 9 月 30 日受付，2016 年 10 月 7 日受理）

調査対象者の概要

対象	年齢	性別	結婚	初来日年	初来日年齢	滞日年数	親の来日経緯	日本での居住地数（小−高）	学歴	来日後に通った学校数（高校まで。括弧内はうち在伯時）	言語	「欠落／喪失」の経験	語り直しの型	現職	希望する職業	職業志向	将来の居住
BR1	24	女	独身	1997	5歳	16年	出稼ぎ	1	高卒	小：3（1）−中：2（1）−高：2（1）	日・ポ	「日本人性」の欠落	選択された「マイノリティ性」	ブラジル食品会社（営業）	通訳	住民媒介型	定住
BR2	21	女	独身	1996	1歳半	19年	出稼ぎ	1	大学在学中	小：1−中：1−高：1	日・ポ・英	「日本人性」の欠落 「ブラジル人性」の欠落	選択された「マイノリティ性」	国際交流協会で通訳（アルバイト）	外国人相談窓口	住民媒介型	定住
BR3	25	女	独身	1990	2ヶ月	25年	スポーツ指導	1	大学中退	小：1−中：1−高：1	日	「ブラジル人性」の欠落	選択された「マイノリティ性」	靴メーカー（ネット販売）	映画監督	住民媒介型	未定
BR4	30	女	既婚	1996	11歳	19年	出稼ぎ	1	高卒（定時制）−ブラジル通信制大学受講中	小：1−中：1−高：1	日・ポ・英	「日本人性」の欠落	選択された「マイノリティ性」	英会話講師	英語教室開設	（帰国）	帰国
BR5	24	女	既婚	1999	8歳	11年	出稼ぎ	1	高卒（ブラジル）	小：1−中：1−高：2（1）	日・ポ	「日本人性」の欠落	安定せず	通訳・翻訳（小中学校）	現職継続、歌手（ブラジル）	安定せず	定住＜帰国
BR6	27	女	既婚	1991年	3歳	22年	出稼ぎ	5	中卒	小：5−中：2	日・ポ・ス	継続性の喪失	持続するものへの気づき	旅行会社	外国人のための教育施設設立	世代媒介型	定住
BR7	22	女	既婚	1997年	3歳	14年	出稼ぎ	3	高卒（ブラジル）	小：2−中：2−高：2（1）	日・ポ・ス・英	継続性の喪失	持続するものへの気づき	通訳・翻訳（小中学校）	教育職	世代媒介型	定住
BR8	25	女	独身	1992	2歳	17年	出稼ぎ	3	専門学校卒	小：2（1）−中：1（1）−高：2	日・ポ・ス・英	継続性の喪失	移動への適応力	アパレル（販売・マネージャー）	独立して起業	空間媒介型	第三国
BR9	26	女	独身	1993	4歳	20年	出稼ぎ	2	中卒（ブラジル通信制）	小：2（1）−中：1（1）	日・ポ	継続性の喪失	安定せず	多文化市民メディア	見通せず	安定せず	定住＜帰国
BR10	26	女	既婚	1998	9歳	17年	出稼ぎ	2	大卒	小：2−中：1−高：1	日・ポ・英	希薄な「欠落／喪失」感		米軍基地通訳	多国籍企業	空間媒介型	第三国
BR11	31	女	既婚	1988	3歳	28年	スポーツ指導	3	大卒	小：3−中：1−高：1	日・ポ	希薄な「欠落／喪失」感		アパレル（ネット販売）	ブラジル食器等の販売	空間媒介型	定住＞帰国
BR12	23	女	独身	日本生まれ	日本生まれ	18年	出稼ぎ	1	大学中退（ブラジル）	小：1−中：1−高：1	日・ポ	希薄な「欠落／喪失」感		通訳・翻訳（小中学校）	家族で農業	（帰国）	帰国

＊言語：日＝日本語、ポ＝ポルトガル語、英＝英語、ス＝スペイン語